

『海外民歌訳』<sup>i</sup>序

わたしはふだんから民歌を読むのが好きだ。それは民族の心情を表していて、一種溶け合って清澄なところがあり、個性の詩が捉え難いとは違い、われわれなんの文芸修業のないものにはいつも比較的理解しやすいように思われる。わたしが好きなのは、イギリスの歌 (Ballad)、一種の叙事的民歌と、日本の俗謡、ふつう“小唄” (Ko-uta) と称されるものである。小唄は純粹な詩ということができ、その長所は、——自然少数の傑作だが、もし恐れ多くも“吾が家”の先王への不躰を恐れぬなら、楽しみて淫せず哀しみて傷らずという意味合いをとても多く含んでいる。しかし、徹底して言えば、これはやはり江南の儿女文学の風趣があり、わたしを恋慕せしめる。ちょうどわれわれが「子夜歌」を愛するように。歌詞は全て叙事詩であり、その性質は弾詞と“節詩”<sup>ii</sup>の間のものであるが、弾詞はあまりに長すぎあまりに結構がありすぎて、一方節詩はあまりに流暢すぎて、確かに近代の作物である。わたしが歌詞を愛するのはその質素のためである。時には又いささか韻文の童話のようであり、幾つかの常套語は、個人の著作の中ではとても嫌な物だが、こうした民歌においては別の趣味があるように思われ、それもわたしの好きな点である。それは女はいつも美しいと云う、肌は乳のように白く、目は夏の日のように明るく、足は小さい (中国人は誤解しないように)、ものを尋ねるのはいつも三回、時日は決まって十二か月の一日、文句もほとんどが定式化している。例えば——

アンナ、お前のほおに頬ずりしたい、  
おまえのあごに口づけしたい。

中国の弾詞にもこうした傾向はある。手の向くままに『再生縁』<sup>iii</sup>から次の四句を引いてみよう。

公子は一目見ると心驚き、慌てて思わず居住まいを正した  
一声かけてご家族はどうしてこちらに？どうか気持ちをお伝えください。

これはちょうど好例である。わたしはあまり好きではないけれども。というのもあまりにもありきたりだから。もう一つ、こういう風にして句を重ねていくと、二、三十冊の本になり、何万行になるかわからない。おのずと飽き飽きしてしまう。歌詞がそれほど長くなければ、こんな欠点はありませんし、又逆にそれが特色になることもあるだろう。

わたしはこうした二様の民歌の他に、英語及びエスペラントの訳本を借りて、各国のを少しばかり読み、好きだと思ったものは、散文で何首か訳し、のちに『陀螺』に収めた。だがわたしがこれらの歌謡を見たのは、全く個人の嗜好によるもので、なんの文芸上の大道理も、あるいはこれが社会にどの様に役立つかなども言えない。わたしが愛読するのは恋愛と神怪の二つの民歌であって、別のもものむろんないわけではないが、いまはどのみち挙げる必要はない。情詩を読む

のはたぶん人の常情だと言えようが、神怪は喜ぶ人が少ないようだ。これは写実主義及び文学革命を標榜する現代にあつてはそうあらねばならないのだが、事實は必ずしもそうではないけれども。ところで、現在の中国は、ロマン時代だの、政治上の国民革命だの、打倒帝国主義だのとワイワイガヤガヤやかましいが、いずれも一種の表現であつて、文学上では、どの派の文士を自称しようとも、著作にはまったくロマン的な色彩が現れ、完全に“ウエルテル熱”に侵され、——いや、もう少し広く言えば、“マンフレッド (Manfred) 熱”の中にあると言える。このような時代には、驚異はそれほど落ちぶれない。それでは、わたしの神怪嗜好もほとんど弁解できよう。わたしの理由はまた別のところにあるのだが。わたしは迷信にとつても趣味を持っている。そうしたおかしい思想と古怪な習俗が実現すればきつと堪えられないだろうが、民謡や童話及び古記録から見れば、古今の人情の同と異が想像され、別の面白さがある。文人は歌謡を古詩として読み、学者はそこから古文化を探求証明しようとする。我々凡人は専ら一つでさえできないのだから、二つを兼ねようとしても、“三脚猫”になってしまうのが落ちである。これは凡人の悲哀であるが、あるいはこれも凡人の幸運であるとも言えるかもしれない。

半農は音韻学をやる専門家であり、歌謡研究にも極めて興味を抱いている。そして彼はまたとても文学的才能があり、新詩の他に、方言で民歌体の詩一卷<sup>iv</sup>をも書いた。これは誰でも知っている。彼は国外の民歌を選集し、漢語に訳し、いま一集として、出版しようとして、わたしに序を書かせようとして、わたしも民歌が好きだからと言った。思うに、わたしは“三脚猫”で、民歌については何の議論もなく、自分の事を少し述べて、お茶を濁すしかない。題目に即した説明は半農自身にやってもらわねばならない。しかしわたしにも責任を持って声明できる紹介の言葉がある。半農のこの『海外民歌』は確かに選もなんの文句もなければ、訳も確かだ。何首かの民歌はかつて『語絲』に載ったことがあり、読んだことがある人には自ずからわかるだろう。見たこともない人なら、この一冊を買って読めばわかるだろう。要するに半農の筆は民謡を書くのにとても相応しい。『瓦缶』一冊〔『瓦斧集』〕が、その証拠である。

中華民國十六年三月三十日北京西北城の苦雨齋にて。

※初出：1927年4月『語絲』第126期

i 『海外民歌訳』 出版された書名は『国外民歌訳』第一集。1927年4月北新書局初版。

ii 節詩 中国の民歌の中でどういうものに当たるのか。未詳。弾詞は楽器で伴奏の入った語り物。

iii 『再生縁』 清代の女性陳端生による弾詞小説、つまり語り物。

iv 民歌体の詩一卷 『瓦斧集』1926年4月北新書局初版のこと。